東大文 SAINSBURY INSTITUTE for the Study of Japanese Arts and Cultures セインズベリー日本藝術研究所

平成30年度 東京の部・北海道の部 報告書

2018年9月8日(Sat.) → 9月22日(Sat.)

東京大学文学部夏期特別プログラム

Report on the Special Summer Program between the University of Tokyo Faculty of Letters and the Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, September 8-22, 2018 in Tokyo and Hokkaido

知床峠より羅臼岳を望む

東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

目　次

1. 巻　頭　挨　拶
いくつもの時間との出会い
東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長　佐藤 健二 …… 2
Foreword to the Summer Program 2018
Prof Simon Kaner …… 3
Head, Centre for Archaeology and Heritage
Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures
Director, Centre for Japanese Studies
University of East Anglia, Norwich, UK

2. サマープログラムの概要 …… 4

3. プログラム実施内容 …… 5

4. 受講者レポート
① Summer Program 2018 diary …… 10
② Thematic Report …… 16
Rebecka Leigh Bale　【ヨーク大学】
Emilie Jean Green　【クイーンズ大学ベルファスト】
Elena Marian　【マンチェスター大学】
János Gergely Némethi　【パズマニー・ペーテルカトリック大学】
Jamie Colin Spiers　【サザンプトン大学】
③ 日誌形式レポート …… 20
④ テーマ別レポート …… 26
小林　鷹義　【教養学部 2 年】
島貫　　亮　【文 学 部 3 年】
野中　崇遥　【教養学部 2 年】
前田　将吾　【教養学部 3 年】

5. 総　括
5 年目の夏
東京大学大学院人文社会系研究科・教授　佐藤 宏之 …… 28

ワッカ原生花園（サロマ湖）にて撮影

1 巻頭挨拶

いくつもの時間との出会い

英国のノリッチに本拠をおくセインズベリー日本藝術研究所の配慮のゆきとどいた連携協力のもとで、この東京大学文学部の交流プログラムに今年も、国内外から熱心な新たな参加者を得て、交流の体験に印象ぶかい記録の一ページが加わったことを喜びたい。

私たちが生きている社会は、媒体（メディア）としてみるならば、じつは巨大な情報が書きこまれ、つねに読みだされている知識と行動の集積である。それを一冊の本にたとえてもいいが、そこまでハンディーで扱いやすくはない。むしろ、迷路の雰囲気をたたえた「図書館」のようなものだろう。その書庫の棚には、誰もが題名だけを話題にする流行本を見いだすこともできれば、何十年も誰も借りず開かれなかった古典の隣に、人前ではとても開けない悪書も並んでいる。だからこの図書館の棚を見てあるくことは、ひとつの旅であり、見慣れていないものと出会う探検である。この交流プログラムもまた、そうした知的な探究の見聞を押し開く、ひとつの扉であってほしいと願う。

交流プログラムの参加者が最初に訪ねた江戸東京博物館について、ちょうど四半世紀前の開館の準備に、歴史社会学者として関わったことをなつかしく思い出す。江戸と東京とをひとつの地域社会の連続のなかでとらえ、地域生活文化のビジュアルな博物誌を構築するという理念は、当時としては意欲的な冒険であった。関東大震災で失われた浅草の凌雲閣十二階の模型のまえで、震災の記憶を語る老人たちが開館当時にはまだお元気で、戦中戦後の暮らしの展示のところでも、思い出話にふける見学者が多かった。

四日目に参加者が散策した下町の谷中・根津・千駄木地域は、そうした人びとの生活に刻みこまれたさまざまな記憶や痕跡を共有しようとした、地域雑誌『谷中・根津・千駄木』の存在において有名である。1984 年の創刊で、各地の地域おこしのリトルマガジンの手本となった。2009 年に終刊となるが、「谷根千」という新語による下町の地域アイデンティティは、まさしくこの雑誌によって構築された自覚であった。

偶然ながら、本交流プログラム開始の二日前に起こった「北海道胆振東部地震」は、博物館には展示されていない、現代災害の生きた経験を垣間見る機会ともなった。停電に対して、いかに現代のあたりまえの生活がもろい側面をもつか、そのつかの間の見聞も参加者の貴重な経験となっただろう。

この交流のプログラムは、地域も時代も異なる「いくつもの時間」と出会う旅だったのではないかと思う。たった何日かの見学の旅でも、つかのまの読書の座学でも、のちの成長を予感させる楽しい思いつきを得ることができる。国境を越えて集った新しい仲間たちのそれぞれが、それぞれの扉を開いた記録の巻頭に小さなあいさつを添えて、このプログラムの実現に力をつくした、すべての関係者に感謝したい。

東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長

佐藤 健二

Foreword to the Summer Program 2018

It is a great pleasure to introduce the report for the latest Sainsbury Institute – Faculty of Letters, University of Tokyo Summer Program. The Summer and Winter Programs, jointly run by the two institutions, are offering a very valuable introduction to cultural heritage in the two countries, along with expert insights into how cultural heritage is conceptualised and managed in Japan and England. At the same time, the programs provide a unique opportunity for students from the University of Tokyo and universities across Europe and elsewhere to spend a fortnight together, sharing experiences and bonding through a common appreciation of the importance of cultural heritage.

We are doubtless very fortunate in England and Japan that cultural heritage is highly valued, and that secure frameworks are in place to protect, conserve and study that heritage, both tangible and intangible. We cannot take these frameworks for granted. In many parts of the world, cultural heritage is under threat. Despite the best efforts of both local and international agencies and countless dedicated individuals, the impact of war, natural disaster and looting means that each year irreplaceable treasures are lost.

Exchange through cultural heritage offers wonderful opportunities to enhance mutual intercultural understanding on many levels. I am sure that all of the graduates of these programs will find themselves in influential positions in whatever career they pursue. It is our heartfelt hope that the memories they acquire during the programs inspire them to advocate respect for cultural heritage wherever they encounter it. We also hope that they will continue to both make use of and contribute to the network of graduates of the programs of which they are a part.

Head, Centre for Archaeology and Heritage Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures
Director, Centre for Japanese Studies
University of East Anglia, Norwich, UK

Prof Simon Kaner

2 サマープログラムの概要

実施期間

2018年9月8日（土）～ 9月22日（土）

内容

前半：本郷キャンパスでのプログラム（9月8日～ 9月14日）

▶江戸東京博物館、日光東照宮、日光東照宮宝物館、インターメディアテク、東京国立博物館、野毛大塚古墳、多摩川台古墳群等、歴史系博物館・歴史文化遺産の見学

▶谷中・根津・千駄木地区での下町文化に関するグループワーク

▶東京国立近代美術館、初台オペラシティアートギャラリー、森美術館等、美術館の特別展・常設展等の観覧

後半：大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設（北海道北見市常呂町）でのプログラム（9月15日～9月22日）

▶擦文文化（11世紀頃）の竪穴住居跡　遺跡発掘体験（北見市大島1遺跡）

▶北見市、網走市、斜里町周辺の遺跡、博物館の見学

▶世界自然遺産知床の見学

▶勾玉製作体験・土器接合体験等、考古資料の製作・整理実習

担当講師

設樂　博己（大学院人文社会系研究科　教　授）

松田　　陽（大学院人文社会系研究科　准教授）

髙岸　　輝（大学院人文社会系研究科　准教授）

熊木　俊朗（大学院人文社会系研究科　准教授）

ライアン　ホームバーグ（大学院人文社会系研究科　特任准教授）

募集方法等

2018年4月に人文社会系研究科ならびにセインズベリー日本藝術研究所のwebsite等により告知。選考後、5月中旬に通知。

受講者

本学の学部学生4名（前期課程学生2名、後期課程学生2名）、セインズベリー日本藝術研究所からの派遣学生5名

支援者
（プログラムに同行）

夏木　大吾（大学院人文社会系研究科　助　教）

國木田　大（大学院人文社会系研究科　特任助教）

萩原　　稔（大学院人文社会系研究科　事務部財務・研究支援チーム専門職員）

藤田　　司（大学院人文社会系研究科　事務部教務係長）

岡部　健二（大学院人文社会系研究科　事務部財務・研究支援チーム係長）

中島　　司（大学院人文社会系研究科　事務部総務チーム）

駒井　早貴（大学院人文社会系研究科　事務部大学院係）

池山　史華（大学院人文社会系研究科　修士課程大学院学生）

門脇　　愛（大学院人文社会系研究科　修士課程大学院学生）

岡崎　咲弥（大学院人文社会系研究科　修士課程大学院学生）

協力

北見市教育委員会等

3 プログラム実施内容

開講式（法文２号館でのガイダンス風景）

東京の部

プログラムの前半では東京に滞在しながら、日本の歴史文化遺産の全体像の把握に努めた。初日のガイダンスでは秋山聰副研究科長が受講者を歓迎し、プログラムの趣旨説明を行った。その後、受講者たちが英語で自己紹介を行い、各人の抱負を語った。二日目以降は、本郷キャンパスでの座学、都内および近郊の博物館・美術館や史跡等への訪問実習を行いながら、日本の歴史文化遺産の多様な側面を学んだ。受講者たちは本郷キャンパス近くのホテルに泊まりながら課題をこなし、日本と海外との壁を超えるかたちで親交を深めた。プログラムの最終日には、各受講者がそれまでの活動をまとめたレポートを作成した。

● 本郷キャンパスでの座学と見学実習

設楽担当講師が日本の先史時代（旧石器、縄文、弥生、古墳時代）の考古学の概要を１時間半ほどかけて説明した。続いて、同担当講師による解説の下、文学部考古列品室にある資料を１時間ほど掛けて丁寧に見て回り、座学で学んだ考古学の知見をモノの理解を通して強化することに努めた。受講者たちは、座学で学んだ考古遺物を、

本郷キャンパスでの座学と見学実習
（文学部考古学列品室で担当講師から解説を受ける参加者）

すぐに手にとって体感することができ、講義内容を深めることができた。

また、日本郵便株式会社と東京大学総合研究博物館の協働によるミュージアム「インターメディアテク」のコレクションも見学した。同博物館は、東京大学が 1877 年の開学以来蓄積してきた学術標本を展示している。受講者は収蔵コレクションとともに、最先端の学術環境にもふれることができた。

● 博物館・美術館での実習

考古学や美術史学はモノないしは作品を通して過去を探求する学問であることを意識し、東京滞在中は博物館・美術館にて実物の資料を見て学ぶ機会を多く設定した。訪問した館は、江戸東京博物館、インターメディアテク、東京国立博物館、東京国立近代美術館、初

博物館・美術館での実習
（東京国立博物館にて担当講師から解説を受ける参加者）

台オペラシティアートギャラリー、森美術館（訪問順）であり、高岸担当講師、松田担当講師が分担しながら解説を行った。期間限定の特別展を見る機会もあり、東京国立近代美術館では「MOMAT コレクション」展、初台オペラシティアートギャラリーでは「イサム・ノグチ ―彫刻から身体・庭へ―」展、森美術館では「建築の日本展：その遺伝子のもたらすもの」を見学した。海外からの受講者にとっては、これらの博物館・美術館での見学実習は日本の歴史文化遺産と歴史全般を学ぶ良い機会ともなった。

博物館・美術館での実習（東京オペラシティ　アートギャラリーにて記念撮影）

3 プログラム実施内容

● 歴史文化遺産サイト訪問

歴史を学ぶ上では、実際の地理的空間に結びつけながら考察を進めることが重要であるとの認識に基づき、東京滞在中には歴史文化遺産サイトも積極的に訪問した。訪問したのは、浅草、日光、上野公園である（訪問順）。浅草訪問は、浅草寺という今日の東京を代表する歴史文化遺産が、今日どのように社会的に受容され、また使用されているのかを直接体験しながら学ぶ機会となった。半日かけて行った日光訪問では、日光東照宮と宝物館を見学した。日光東照宮では、修復を終えたばかりの陽明門を見学することができ貴重な機会となった。上野公園では、松田担当講師が公園内の建築物、彫像や記念碑の説明を通して、日本文化の解説を行った。等々力渓谷と野毛大塚古墳を訪問した際には、東京 23 区唯一の渓谷を体験し、それから造営時の姿に復元された古墳の墳頂に登って、古墳文化についての理解を深めた。また、多摩川台古墳群もあわせて見学した。

● 谷中・根津・千駄木でのグループワーク

本プログラムでは、本学部学生とセインズベリー日本藝術研究所の協力により選抜された海外の学生との国際交流も目的となっている。東京大学に近い下町である谷中・根津・千駄木エリアを、受講者たちが中心となってグループワークを行った。本学部学生と国外の学生とを合わせた 2 グループで、それぞれ訪問する歴史文化遺産などを自由に決め、東京下町の文化について主体的に学んだ。各グループでは、下町風俗資料館、子規庵、朝倉彫塑館、根津神社、寛永寺などを訪問し、その歴史文化遺産の歴史や意義について学んだ。本学の受講者が海外の学生にレクチャーする場面も多くあり、英語で議論する良い機会となった。

谷中・根津・千駄木でのグループワーク（当時の面影を残す子規庵にて）

歴史文化遺産サイト
（野毛大塚古墳にて担当講師から解説を受ける参加者）

谷中・根津・千駄木でのグループワーク（下町風俗資料館にて下町文化に触れる参加者）

本郷キャンパス安田講堂をバックに記念撮影

常呂の部

プログラムの後半では北海道に移動し、人文社会系研究科の附属施設である常呂実習施設で北海道の歴史遺産と自然遺産について体験的に学んだ。常呂のプログラム中は施設に附属する学生宿舎に宿泊し、自炊もしながら課題に取り組み、受講者同士や参加スタッフ、そして地元北見市常呂町の支援者との交流を深めた。実施前は、９月６日に発生した北海道胆振東部地震の影響が心配されたが、一部の食材や消耗品類の入手に難があった程度で特に制約や混乱はなく、予定どおりプログラムを実施することができた。プログラムの最後には各受講者がレポートを提出し、担当講師から修了証の授与がおこなわれた。

● **北海道の先史文化概説（講義）**

常呂でのプログラムは、「北海道の歴史遺産と自然遺産について体験を通じて学ぶ」ことを主眼としている。プログラム全体への理解を深めるため、熊木担当講師が北海道の先史文化の概要について講義をおこなった。縄文時代以降、本州とは異なる歩みをみせる北海道の先史文化の特徴について、続縄文文化から擦文文化、そしてアイヌ文化の成立に至る流れを、本州やロシア極東との交流関係にも注目しながら順を追って紹介した。受講者からは「考古学上のアイヌ文化」とオホーツク文化の関係に関する質問がなされるなど、特にアイヌ文化の成立過程に対する関心の高さが目立ち、このプログラムに対する期待の高さがうかがわれた。

● **遺跡出土土器の接合体験**

遺跡から出土した土器の破片を接合する作業の体験を通じて、考古学研究の方法について実践的に学んだ。遺跡出土の土器片について１点１点文様を観察して型式毎に分類し、ジグソーパズルを合わせる要領で破片同士の接合を試みる作業をおこなった。教材となる土器片については、北見市教育委員会から実物の続縄文土器を借用した。簡単に接合できるような破片は少なく、この作業は根気を必要とする難易度の高いものであったが、熊木講師から接合する際に着目すべき点について助言を受けた受講者は、互いに協力しながら課題に取り組み、いくつかの土器片を接合することができた。実際の遺物整理ではこの作業を数ヶ月も続けるという説明を受け、受講者は考古学研究や埋蔵文化財保護にかかる労力について実感できた。

● **勾玉の製作体験**

縄文時代の勾玉を実際に製作する体験を通じて、古代の技術や造形に対する理解を深めた。題材としたのは常呂の遺跡から出土したヒスイ製の勾玉で、実際の製作においては加工しやすい「滑石」を材料として約２時間かけて手作業で削って磨きをかけ、各受講者が１個ずつ勾玉を完成させた。製作作業にあわせて、当時の加工技術や原材料と製品の流通についても熊木講師から説明がなされた。製作体験の後に、講師から当時の原材料であるヒスイを加工する場合には滑石よりも遙かに労力を必要とすることが説明され、受講者は、

ところ埋蔵文化財センターの見学（先史文化概説講義に続けて実施）

遺跡出土土器の接合体験
（１点１点文様を観察して型式毎に分類し、破片同士の接合を試みる参加者）

遺跡発掘体験
（「大島１遺跡」にて調査トレンチ内の土を丁寧に掘り進める参加者）

3 プログラム実施内容

縄文時代の技術と、勾玉が「威信材」として評価される背景について理解することができた。

● **実習施設周辺の遺跡見学**

実習施設の周辺には、国指定の史跡「常呂遺跡」を中心として大規模な先史文化の遺跡が数多く存在している。このうち、史跡「常呂遺跡」の各地点（ところ遺跡の森地点、栄浦第二遺跡、トコロチャシ跡遺跡）とトコロ貝塚を見学し、遺跡の保護と活用に対する取り組みを実例で学んだ。遺跡では、地表面に窪みで残る竪穴住居跡や、復元された竪穴住居、アイヌ文化の砦の跡に掘られた壕の様子を見学した。また、トコロ貝塚ではカキなどの貝殻が、トコロチャシ跡遺跡では石器や土器が地表面のあちこちに露出しており、それらに実際に触れることによって歴史遺産の存在を体感することができた。

● **遺跡発掘体験**

常呂町内に存在する「大島 1 遺跡」において遺跡の発掘を体験し、考古学の調査と研究の方法について学んだ。大島 1 遺跡は、擦文文化期及び続縄文文化期とみられる竪穴住居跡が窪みで残る集落遺跡である。発掘は、昨年度に発掘体験を実施した 1 号竪穴の周辺に、新たに調査トレンチ二箇所を設定して実施した。調査の目的は、トレンチ内の土層堆積の観察と 1 号竪穴周辺の遺物分布状況の把握である。発掘は午前 10 時頃から開始し、午後 3 時頃までおこなう予定であったが、午後から雨となったため、午後 1 時の再開時刻の時点で終了とした。受講者は調査トレンチ内の土を丁寧に掘り進め、講師の指導のもとに土層堆積の変化を観察するとともに、トレンチ内から土器や石器などを検出した。また、発掘終了後は実習施設内にて遺物の水洗い作業も体験した。雨天による予定繰り上げは残念であったが、発掘調査に初めて参加する受講者も多く、考古学研究を実地で学ぶ貴重な経験となった。

● **世界遺産　知床見学**

世界遺産に登録されている知床を訪れ、自然遺産への登録理由となった多様な生態環境とその相互関係、豊かな生産性という特質を実見するとともに、自然の保全と人の利用との両立を目指す保護と管理のあり方についても学んだ。斜里町ウトロまでの行程を含む移動は全て車で行い、斜里町立知床博物館、斜里町カモイベツ遺跡、知床峠、知床五湖、オシンコシンの滝といった主要地点を巡回した。受講者は火山、森林、湖沼、断崖などの多様な景観に触れながら、それらの具体的な保護管理の方法を現地で視察した。また、カモイベツ遺跡では、北海道埋蔵文化財センターが発掘調査を実施している現場を見学し、センターの発掘担当者から遺跡と出土遺物の説明を受けた。発掘調査の様子を現場で見学できたことは、前日の発掘体験と合わせて、考古学の現場を体験する得難い機会となった。

● **博物館見学**

実習施設の近隣に位置する各博物館、すなわち、ところ遺跡の館、常呂町郷土資料館（以上北見市常呂町内）、北海道立北方民族博物館、網走市郷土博物館、博物館網走監獄、モヨロ貝塚館（以上網走市内）を見学した。これらの館はいずれも地域の特色ある歴史や文化を紹介した博物館であり、受講者は展示資料を見学しながら、地域の歴史遺産について理解を深めた。

● **マンガにおけるアイヌ像（講義）**

ホームバーグ講師が " マンガにおけるアイヌ像 " と題した講義をおこなった。講義では、アイヌが主要な登場人物として描かれている『カムイ伝』（白土三平）、『シュマリ』（手塚治虫）、『ゴールデンカムイ』（野田サトル）といったマンガが紹介され、これらのマンガについて、ストーリーの解説、描かれた内容の文化的・社会的な背景、作者の思想やアイヌ文化に対する知識と表現などの観点から、考察がなされた。また、欧米における漫画の出版や日本の漫画の翻訳事情など、マンガ出版に関する日本と欧米との違いについてもあわせて紹介された。受講者は、取り上げられた題材を通じて、近現代の社会におけるマイノリティーの置かれた立場や、マンガでそれを表現することのもつ意味、マンガというサブカルチャーをめぐる日本と欧米の事情などについて学んだ。

知床見学
（世界遺産に登録されている知床五湖にて記念撮影）

東京の部

常呂の部

4 受講者レポート ①

Summer Program 2018 diary

Rebecka Leigh Bale, Emilie Jean Green, Elena Marian, János Gergely Némethi, Jamie Colin Spiers

Tokyo part

DAY ONE – 8th September

We all met up at the Faculty of Letters of the University of Tokyo at 13:30. One of us was late, most of us were suffering from jetlag, but we all were at last at our destination. A brief summary of the program was given and then we introduced ourselves. Each of us was given a windbreaker, made specially for this program. After the official induction we went to the hotel by taxi and then checked in. Later those of us who were not so tired decided to visit Asakusa and the Sensō-ji Shrine before the dinner. We had a Japanese-style dinner, after which four of us went to explore Ueno Park a little bit.

DAY TWO – 9th September

The day started with breakfast in the Japanese restaurant below our hotel. At 8:30 we went to the Hongo Campus, where Professor Hiromi Shitara gave a lecture on the prehistory of Japan, covering the Palaeolithic to Kofun periods. Some books on Jomon archaeology were circulated during the lecture. After the lecture we looked at the archaeological collection held by the Archaeology Department of the University of Tokyo. The collections included artefacts from ancient China, Korea, Britain and even South America. We had lunch in a Japanese restaurant then went to visit the Edo-Tokyo Museum. The exhibition presented in an enormous building was very well made, showcasing various items such as a full-size reconstructed Edo-period bridge and a lot of maquettes, pictures and interactive devices. It could capture the mind of even those who were not very interested in history or the Edo period. After leaving the museum some of us went back to the hotel, while the others visited the Tokyo Skytree. At night we had a Japanese-style dinner, after which we took off to a bar to play darts and billiards.

DAY THREE – 10th September

After a quick breakfast we left for Nikko at 8:00. At Nikko there are the tomb of, and a shrine dedicated to, Tokugawa Ieyasu, along with a shrine dedicated to his grandson Iemitsu and several other religious buildings. From Nikko Station we took a crowded shuttle bus to the shrine complex. We visited the richly decorated shrine dedicated Tokugawa Ieyasu, located along an ancient road in a cedar forest. We also visited his grave further up in the mountain, walking up the stone stairs covered with moss in the green forest. At this point it started to rain a little, so we went back to the center of Nikko to have lunch in a Japanese restaurant. After the lunch we decided to go to the museum and treasury of Tokugawa Ieyasu, since the rain made it impossible to visit the shrine of his grandson. In the treasury we saw the armour and weapons of the first shogun, along with many of his personal items, paintings depicting him and his life, calligraphies by him and three portable shrines. Back in Nikko we still had some time before the return train, so we sat into a little cafe, had drinks and ate shortbread. After this on the way home there was some accident in front of our train, which obliged our train to stop. We waited for some time and then went back to Ueno, taking two different trains. This was followed with a Western-style dinner of spaghetti and pizza, after which we went to a local amusement park.

歴史文化遺産サイト訪問（日光東照宮陽明門の前で記念撮影）

DAY FOUR – 11th September

We started off at 10:00 and split into two groups to explore the Yanaka area in Tokyo on our own. We wanted to start with the Calligraphy Museum, but since it was closed, we went to the house of the poet Masaoka Shiki beside the museum. It was a nice little Japanese-style house, with a small flower garden in the backyard and some personal items of Shiki on display. No English explanation was given though (this was a problem at most places we visited). We also visited Jomyōin temple which had numerous Buddha statues, the Yanaka Ccemetery, Tenno-ji Temple, the foundations of the five-story Pagoda (which was burned down in 1957), Kanei-ji Temple and Nezu Shrine. We also accidently found the tomb of Takahashi Deishu, a spear fencer in the last days of the Tokugawa shōgunate. We had lunch in the middle of this tour, in a 50-year old Japanese house that has been converted into a restaurant. After a long walk we went the old Taisho-period building of the Tokyo Station. There we visited one more museum, the Intermediatheque, which displayed various items such as anatomical skeletons, African tribal statues and musical instruments. To finish the day we stopped in a cafe in the same building. Back at the hotel we had a Japanese-style dinner. After this, the whole group went out to Ueno Park to have a drink.

DAY FIVE – 12th September

Today we visited three museums: the National Museum of Modern Art, Tokyo (MOMAT), the Tokyo Opera City Art Gallery and the Mori Art Museum. At MOMAT modern and contemporary pieces of Japanese art were on display, with special attention given to the late Meiji period. In the Opera City Art Gallery there was an exhibition on the art of Isamu Noguchi, with his paintings, Jomon-inspired ceramic sculptures, lamp plans, gardens, and so on. There were also two smaller exhibitions showing abstract painting and artworks of Kimura Saiko. Finally in the Mori Art Museum there was a brilliant exhibition on Japanese architecture. This was set in a skyscraper, on its 52nd floor, with all the windows showing the view of whole Tokyo from above. After the exhibition we went to the top of the skyscraper, looked at the view and took a group photo.

DAY SIX – 13th September

Today's plan was to visit the Tokyo National Museum. However, since we had plenty of time before its opening, we took a little walk around Ueno Park. There was a Buddha face, which was a part of a gigantic statue originally belonging to the Kanei-ji Temple; the statue was destroyed by an earthquake and later melted down during the Second World War. We also visited a kofun which few people seemed to know about. We also saw foundation stones of old Kanei-ji temples which few people seemed to know about; the temples were destroyed during the Boshin War. We saw the statue of Saigō Takamori and the monument dedicated to the Shōgitai. In the meantime the museum opened, so we went in to see its exhibitions. There were displays on Japanese archaeology, art history, and there was an Asian collection as well. In the afternoon we went to the Kabuki Theater to see the play Shunkan.

DAY SEVEN – 14th September

Today was the day of kofun. We started with a walk along a stream bank in Todoroki. About halfway through we went up from the bank and visited Nogeotsuka Kofun. This kofun was a rather large one, of a scallop-shaped design. There used to be a small shrine on top of it. We were told a story about three local men who tried to rob the kofun and all died strangely. Today one can see on the top level of the kofun illustrations that show the position of the graves below, together with life-scale drawings of grave goods. After this we went back to the stream and moved on to Tamagawadai Park. This park

歴史文化遺産サイト訪問（野毛大塚古墳にて記念撮影）

contains eight kofun mounds. Some of them are barely recognisable, some are hidden under trees, but there was a museum which creatively and effectively explains the kofun. On the top of one of the eight kofun there was a shinto shrine, which we visited. After the trip some of us went to the National Museum of Nature and Science in Ueno, while the others went back to the hotel to begin packing our luggage.

DAY EIGHT – 15th September

We left for Haneda Airport at 9:00. We arrived in Hokkaido a little after 2pm and were taken to Tokoro Fieldwork Station by car. We settled into our rooms and attended a short briefing session. Then around 5pm we began preparing for the welcome party. We had an enormous "Genghis Khan" dinner, with lots of soba (thanks to Mr. Kanazawa), wine and sake.

Hokkaido part

DAY NINE – 16th September

The first day at Tokoro began with a presentation given by Kumaki-sensei on the prehistory of Hokkaido, with emphasis on the Jomon, Satsumon, Okhotsk and Ainu cultures in Hokkaido. We were introduced to the material cultures representative of each culture as well as their subsistence strategies, dwelling types and worldviews. For instance, the Ainu are known for the bear ceremony (in the afternoon we had a chance to see a few old pictures at Tokoro Local Museum depicting Ainu people gathered for such a ceremony). After lunch we tried to refit pottery shards belonging to three Epi-Jomon types. Although touching actual Jomon pottery was so exciting, we soon came to realize how difficult the refitting task actually was. That was partly because those hundreds of shards of various types had not been excavated from secure contexts, like a pit-dwelling or a burial, but consisted of mixed ceramic materials from all over the site. Of course, more time and experience would also have been needed.

Next, we visited the Tokoro Archaeological Museum which showcased finds from the excavations conducted by the University of Tokyo in nearby areas. Apart from all the interesting finds exhibited, we were impressed by a plan showing the extremely high density of prehistoric dwellings present in the area, of which only a small number were excavated. The Tokoro Local Museum threw light on the much more recent past of the village. Even though some of the collections were not put together yet and the objects were not accompanied by explanatory captions, the museum certainly had a mysterious air of a cabinet of curiosities.

We finished the day with a surreal view of Saroma Lake and Sea of Okhotsk at Wakka Natural Flower Garden. Inevitably, some of us could not resist the temptation to dip their feet in the cold water of the sea.

東京大学常呂資料陳列館の見学
(担当講師からの説明を熱心に聞く参加者)

DAY TEN – 17th September

At 9:30am we gathered in the Fieldwork Station for a soapstone carving workshop. After a brief presentation about Jomon comma-shaped beads given by Kumaki-sensei, we proceeded to make beads by ourselves. In the Jomon period this type of comma-shaped beads were sometimes made out of jade, a beautiful green and rare stone, but equally hard and difficult to work. Soapstone – or talc – on the contrary was surprisingly soft, and we managed to create comma-shaped beads relatively quickly by rubbing the surface of the stone with sandpaper. With the help of Kumaki-sensei who drilled holes through the beads, we made some pretty Jomon necklaces.

After having lunch we returned to the Fieldwork Station where Kumaki-sensei gave a lecture on Oshima site which lies on the eastern bank of

Tokoro River and showed us photographs of Satsumon-culture pit-dwellings excavated by the University of Tokyo last year. Following the lecture we visited a museum dedicated to the sites of Tokoro region (next to which there were two reconstructed Satsumon pit-dwellings), an Ainu fort and Tokoro Shell Mound, dated to Middle Jomon period. Very close to the Ainu fort, Fumika and Takaharu even found obsidian flakes and an arrowhead on the surface!
For dinner, besides the food cooked by our colleagues, we enjoyed a delicious scallop and eggplant curry brought by Mrs. and Mr. Kanazawa, for which we could not be grateful enough!

DAY ELEVEN – 18th September

This day was initially planned to be dedicated entirely to the excavation at Oshima 1 site, where 165 Jomon and Satsumon pit-dwellings had been identified. As Kumaki-sensei told us yesterday, the excavation of Oshima 1 site started last year by the University of Tokyo. We were divided into two groups, each assigned a 1×4 test trench. The aim of digging the two trenches was to reveal the stratigraphy and potential scatters of pottery or other artefacts outside the pit-dwellings. The trench that my group excavated (led in spirit by János who felt in his natural element digging) did not reveal any sort of material culture. However, our colleagues excavating the other trench retrieved a number of (Satsumon/Epi-Jomon) pottery shards, a nice arrowhead and a few stone flakes.
Unfortunately, just when we were about to leave for lunch it began raining and it was decided that we should not resume the excavation. The afternoon was therefore spent washing finds in the Fieldwork Station, resting and cooking dinner. Even if we were a little bit disappointed for not being able to dig for longer, it was still interesting to get a sense of how the soil looks like, how it feels and how easy it is to excavate. Also, the free time we had in the afternoon allowed us to reflect on everything we had learnt and experienced on the past few days.

遺跡発掘体験
（調査トレンチ内から検出した遺物の水洗い作業を行う参加者）

DAY TWELVE – 19th September

This was by far the busiest and most exciting day. We left early, at around 8:30am and, after a one-hour drive to the east, along the shores of Okhotsk Sea, Notoro and Abashiri Lskes we made a quick stop at Koshimizu wild flower preserve. The fact that the flowers were not in bloom was not bothering at all, as the tender sunlight and the view of Okhotsk Sea made for a pleasant walk anyway. In the meantime 3 more staff members from the University of Tokyo joined us. One of them is Holmberg Ryan Eric-sensei who will give a lecture about manga on Friday.
After 20 minutes at Koshimizu wild flower preserve we hopped back in the van to continue our journey eastwards. Our next stop was at Shiretoko museum which, apart from prehistoric artefacts and ethnographic collections, also exhibits biological and geological specimens from Shiretoko. Therefore, this museum was interesting in the sense that it draws a bigger picture of the region, not only from the point of view of human habitation but also emphasising geological processes and the diversity of wildlife and vegetation.
Since we did not have the chance to excavate for too long at Oshima site, we were very excited to visit Kamoibetsu site (Okhotsk Jomon cultures) as it was being excavated by archaeologists. Abe-san, the director of the excavation, kindly introduced us to the nature of the archaeology at the site and accompanied us on a tour of the trench. Thanks to Ryan-sensei who translated in English for us we understood the explanations given by Abe-san regarding the general features of the site as well as its stratigraphy which was quite easily visible in section. Although we were all genuinely curious to learn as much as possible about the site, János and I probably missed a minute or two watching two tiny

mice engaged in a Sisyphean attempt to break free from a deep pit by trying to run up its steep, sandy slopes. On the return at the store-room, we were allowed to look at and even touch some of the finds, including some shards of rare red-painted Epi-Jomon pottery.

Following the visit at Kamoibetsu the road drove us more and more into the wilderness, up into the mountains towards North-East. The view from the car was of an outstanding beauty and when we got off at Shiretoko Pass the panorama was truly breath-taking. On one side – Mount Rausu, on the other – Mount Onnebetsu and in front of us Okhotsk Sea and Kunashiri island in the distance. Shiretoko Peninsula, from its central part to Shiretoko Cape was designated a World Heritage Site and we felt very grateful for having the chance to admire its beauty.

Our last stop was at Shiretoko Goko lakes. We first thought we were not going to be able to take a walk to see the lakes as it started raining, but after a few minutes the rain stopped and a rainbow appeared on the sky. As it was quite late already we only had time to see one of the lakes but we were still very happy to admire the view of the lake in front of us, a mountain in the background and forest on the left – in the reddish light of the approaching sunset.

The return journey seemed very long as we were extremely tired, but we managed to sleep in the van. In spite of the fact that he was probably just as tired as we were, Kumaki-sensei safely drove us back home and for that we are deeply grateful.

DAY THIRTEEN – 20th September

Today we felt a little nostalgic as this was the last day with activities. We gathered at 9am and hopped on the bus for another trip. First, we visited Hokkaido Museum of Northern Peoples which was particularly impressive because the ethnographic collections were bringing together tools, costumes, ritual objects associated with many Northern peoples around the globe: Ainu, Aleut, Inuit/Eskimo, Sami, Northwest Coast Indians, Northern Indians, Sakhalin and Amur Region Peoples and Siberian Peoples. The atmosphere in the museum was also very interesting; videos of rituals and dances performed by some of these peoples were being played on small screens placed next to some of the showcases. Just before the departure, Takatomo, Ryo, János and I proudly put on Mongolian traditional costumes left for the visitors to try out!

Second, we went to Abashiri Local Museum, the oldest museum in Hokkaido. The ground floor was dedicated to collections of specimens of flora and fauna from the region, including taxidermied animals. At the second floor we saw collections of Ainu jewellery, tools and costumes, Jomon, Satsumon and Okhotsk pottery and also a collection of objects from the past two centuries.

Today we had a special lunch at Abashiri Prison museum where we were served a prison-style lunch set which was, in fact, quite delicious! Afterwards, we had plenty of time to wander around the prison buildings, of which 8 were designated nationally Important Cultural Properties and 6 Registered

遺跡見学（カモイベツ遺跡にて説明を受ける参加者）

博物館見学（モヨロ貝塚館にて）

Tangible Cultural Properties. In fact, the museum does not stand on its original site. The prison buildings were relocated and restored; on the original site a new prison was subsequently built and is now in use. The fine weather made our visit very pleasant; the trees, the flowers, the grass and all the buildings were all very well maintained. However, the experiences of the prisoners incarcerated here and the hardships they endured certainly made their perception of the place very different from what we felt today.
Our final stop was at Moyoro Shell Mound Museum. Here, we had a chance to see some of the artefacts and bones excavated from this Okhotsk village. The actual building of the museum stands on the archaeological site where a number of pits (which were once dwellings of the Moyoro people) are still visible today. Perhaps the most interesting part of the museum was the room containing replicas of Moyoro graves, set up on the original location (now within the museum). A particular feature of the mortuary customs of the Moyoro people was that they used to place a pot on the head of the deceased person. After covering the body with soil, the bottom of the pot could be seen sticking out of the ground.

DAY FOURTEEN – 21st September

Today we finally had the chance to listen to Holmberg-sensei lecturing on the Ainu-culture inspired manga, such as the Tales of Tono, Iomante and Shumari. We learnt that for many years, manga stories were based on the culture and history of Honshu, whereas the rich culture of Hokkaido was sidelined. This changed with Shirato Sanpei's Kamuiden which brought to light the Ainu people and their customs for the first time in manga.
Shortly after the lecture, the completion ceremony was held, when Kumaki-sensei awarded us certificates of completion of the Summer Program. The rest of the time was to be spent writing reports and finalising the diary, with a farewell party in the evening marking the end of the Program. We feel happy and thankful for having been given the opportunity to live such enriching experiences in Tokyo and Hokkaido but at the same time sad that we will very soon have to leave this place. We are indebted to all professors and to Ikeyama-san, the teaching assistant, who put all the effort into making our stay in Japan as pleasant as possible and we hope to meet them again in the future.

博物館見学（博物館網走監獄にて）

Thematic Report

Rebecka Leigh Bale, Emilie Jean Green, Elena Marian, János Gergely Némethi, Jamie Colin Spiers

Theme 1: Accessibility and dissemination of information in Japanese Museums

Whilst there is debate on the language accessibility for international audiences within museums, there is another issue which is often not accounted for. This issue consists of presenting artefacts and information to individuals with disabilities.

The museums we visited did not always appear to make a conscious effort to consider the needs of people with disabilities, which does not only exclude international visitors but also the people of Japan. From a western perspective, many museums will offer a variety of aids to assist visitors who require them and will often actively advertise these features. These aids or features will often include braille guides, guides with large font texts, ear defenders, or perhaps even just signage indicating whether guide dogs are allowed or whether the museum has any particular features that may be triggering or inaccessible to individuals with certain illnesses or disabilities. The museums we visited in both Tokyo and Hokkaido did not appear to offer such features or even advertise them.

The majority of museums that we visited did offer audio guides, and whilst this is primarily aimed at translating information for international visitors to enjoy, it does also help with those who are hard of sight or have difficulties with literacy.

Unsurprisingly however, the museums in Tokyo which are catering to a larger demographic of both national and international people, generally appear more accessible. There were many spacious museums with lifts to allow people with visible and physical disabilities to move around freely. This was not always the case in the more rural museums in Hokkaido with some buildings exhibiting galleries or features that are only accessible via stairs.

Understandably though, it is not always easy to provide access for wheelchair users without damaging the historic or structural integrity of the building and sometimes access is limited. For example, the Abashiri Prison Museum was largely accessible for wheelchair users but did have some buildings that had ramps to enter the building but stairs to access the displays inside.

On the other hand, non-visible illnesses and disabilities are not considered, this is a problem that is shared internationally, and it is difficult to create a space that is fully accessible, but it is not impossible. For example, the Hokkaido Museum of Northern Peoples had many excellent galleries and offered interactive displays with hands-on features (some of which could also be accessed in other languages). However, each artefact and gallery was colour coded, which of course would cause a lot of confusion for individuals with colour-blindness. The staff were friendly enough and Japanese speakers could of course ask for help with this if they felt comfortable doing so.

The other thing that was noticed by many of the

博物館・美術館での実習
（東京国立博物館にて記念撮影）

博物館見学（モヨロ貝塚館にて担当講師から解説を受ける参加者）

western students is the dissemination of the information itself, the majority of the museums did not have interactive elements, which is not always the best way to present information. This is much less of an issue, however, as anyone planning to visit a museum is usually aware that there will be a lot of reading involved and not always a lot of practical/interactive hands on activities.

To conclude, accessible resources are often overlooked; unfortunately this means that many people are denied the opportunity to learn about the history and heritage of their own country. As mentioned, this is not a problem specific to Japan, but an international one; it seems a shame that museums are often more accessible to international audiences, than to native people that are unable to experience them because of a disability. Perhaps it was more striking here as we were unable to read any signage pertaining this information or ask for it - but it is something that will hopefully be addressed more diligently in the near future not just in Japan but worldwide.

Theme 2: Spirituality, Heritage, and National Identity

Spirituality is deeply intertwined within the national identity of the Japanese people. During the two weeks of the Tokyo/Tokoro Summer program we visited a number of historical and cultural sites within Tokyo and Hokkaido, from shrines to temples, and from museums to National Parks. Across most, if not all these places, the distinctions between religion/spirituality and heritage were very much blurred. In the preservation of heritage, also is preserved the traditional spirituality of the Japanese people. The communication of heritage, history and archaeology illustrates the spiritual nature of the Japanese cultural identity. For example, we were told that in Japan there are around 120 kofun that have been protected as the sacred resting places of members of the Japanese Imperial Family. For this reason, there are no excavations permitted upon them. Also, during our time in Japan we also visited a number of different shrines and temples that are sanctioned as World Heritage sites, the frequent inclusion of these on the program of this Archaeological and Heritage program once more illustrates the importance of spirituality and religion in the Japan's past and present. Whilst this does not necessarily denote the spirituality of all members of Japanese society, it again illustrates the role of spiritual heritage in Japanese cultural identity. This is also reflected in presence of spiritual themes such as gods, spirits, demons, and the like within many aspects of modern and contemporary Japanese culture like manga, anime, games and television programs. It is also noticeable that there is a sensitive approach to the conduction of archaeology in regard to spirituality.

In comparison to sites visited in Tokyo and Hokkaido, whilst there is some overlapping of the spiritual heritage, there is some disparity within the nature of the spirituality. The events that led to the formation of contemporary Japan on the islands of Honshu and Hokkaido follow different paths until 1868 when Hokkaido came under Japanese administration. For Hokkaido, the lectures and museums we visited depicted a unique heritage built

谷中・根津・千駄木でのグループワーク（子規庵にて記念撮影）

世界遺産　知床見学
（知床火山群を背景に知床五湖を散策する参加者）

upon the admixture of different cultures post-Jomon, different from that of mainland Honshu. These including the Okhotsk and Tobintai cultures, and the later Ainu people. The people of Hokkaido experienced different conditions and environments from the people of mainland Japan, in which they developed different subsistence strategies and economies featuring the continuation of hunter-gatherer cultures, and later partially agricultural cultures. Within the collections and museums that we visited in Hokkaido there was an expression of a spirituality that was deeply entwined with nature, which was seen in the bear rituals of the Ainu and Okhotsk people. The heritage and spirituality of the natural world in Hokkaido is also reflected in the contemporary, with many national park and natural conservation areas. However, both Honshu and Hokkaido heritage shares worship of the natural world such as that we saw at the Nikko Futara-san Shrine where mountain worship has taken place since ancient times.

Theme 3: Preserving a Modern Japan:

Understanding the Dichotomy of Attitudes towards Archaeological Conservation and Preservation

2018 in the Western world has been undoubtedly significant in shifting attitudes towards environmental conservation and preservation – something which is innately linked to the conservation of archaeological sites and material in terms of how landscapes and seascapes continue to remain prime archaeological material – with a spotlight being shined directly onto the practices and methods in which we carry out modern life and how these may impact the natural and anthropogenic world(s). As such, something which struck a number of the Western students as existing entirely differently from our culture(s) was the attitudes taken towards environmental protection and preservation.

Notably, the Okhotsk area of Northern Hokkaido presented us with an interesting dichotomy at play; on one hand, the efforts of the University of Tokyo, the Tokoro Fieldwork Station, and other cultural institutions in the area have led to impressive reconstructions of cultural and material remains and, on the other, the effects of an encroaching modern Japan play a distinct role in damaging these sites. One site which seemed to display this incredibly was the Moyoro Shell Mound in Abashiri (an Okhotsk shell mound dating from c.1300 years ago). Whilst the site itself proved to be an interesting blend of interactive displays and reconstructions which did not fail to disseminate important historical information, I, personally, felt somewhat aware of the intrusive construction and industrial works taking part within the site's boundaries – the Todai professors did even point out that some significant portions of the site had been destroyed by this construction work. However, this process was described in a way that seemed to be accepted; i.e. the destruction of sites to pave the way for growing modernity in the area seemed to not be seen with a negative attitude, but rather a neutral one. Due to this, the dichotomy of archaeological conservation became apparent to us in that general attitudes seemed to favour the idea of two distinct conversations and schools of thought – the archaeological and the modern. Interestingly, I found

谷中・根津・千駄木でのグループワーク
（谷中の古い町並みを散策する参加者）

博物館・美術館での実習
（六本木ヒルズ（森美術館）の屋上にて記念撮影）

this to be an example specific to the Hokkaido area as the Honshu area seemed to provoke differing thoughts in terms of archaeological conservation for me.
In the first portion of the Summer Program, which largely took place in the Tokyo region – with a trip being taking to the historical site of Nikko also –, a different aspect of Japanese archaeological conservation and preservation was brought to our attention. Whilst Tokoro and Abashiri exhibited the effects of encroaching modernity on archaeological sites, Tokyo demonstrated the ways in which a fully modern city views conservation processes. In opposition to the reconstruction works taking place in Hokkaido, numerous sites in the Tokyo area were seen to be somewhat forgotten about unless they were tangible material remains in some of the larger museums. For example, our seventh day on the program involved exploring a range of kofun burials around the highly developed regions of Ueno and Tamagawadai. On this visit, Akira Matsuda (a professor at Todai) explained that a number of kofun burial tombs in the area had been repurposed multiple times throughout their lifetimes before ultimately being delegated as land to be used within public parks rather than tombs. Interestingly, Akira made the observation that local councils and governments today seem to have difficulty in reconstructing kofun tombs anew due to a lack of capital after the 2008 global recession and that this may have directly impacted the public's attitude towards archaeological conservation.
However, it would be wrong to assume that these trends are unique to Japan. Instead, it would be wiser to assume that, due to how the Summer Program introduced us to two ends of the urban development spectrum (i.e. the busy Tokyo area and the, quiet, rural Tokoro) in a short period of time, it is a matter of us experiencing an etic observation of a culture that we are not familiar with. I personally could name multiple sites within Hampshire, England that follow similar patterns of modern encroachment.
Ultimately, the Summer Program has excelled at introducing a number of us to differing perspectives and methods surrounding the conservation and preservation of archaeological sites, materials, and landscapes in a way that we were not previously aware of. Whilst they may not be culturally unique observations, these perspectives and methods are what help us as archaeological students in the future to safeguard culturally important landscapes and seascapes.

夕暮れ時の多摩川を望む

■ 日誌形式レポート

小林鷹義、島貫亮、野中崇遥、前田将吾

1日目—9月8日

9月8日、この日がプログラムの初日である。炎天下の中、汗をダラダラとかきながら参加者の学生9人、及び國木田先生をはじめとする引率の先生、TAの方々が本郷の法文二号館に集結し、ガイダンスを行った。はじめに文学部の先生方からの挨拶があった後、参加者の学生同士で自己紹介をしあい、プログラムの開始が粛々と宣言された。海外から来た学生はてっきり一緒に来日しているものだと思っていたのだが、どうやら皆バラバラに来たようで、中には一週間前から日本に到着していて神社仏閣を既にかなりの数まわってしまったという人や、北海道で震度7の地震が起きた時に函館にいて、そこから新幹線に乗って東京までやって来たという人までおり、今回参加の海外学生の行動力の高さに開始早々度肝を抜かれてしまった。

プログラム開始の数日前に発生した北海道胆振地方を震源とする地震の影響で道内各所で混乱が生じているという報道があり、プログラムの北海道での活動について心配する声があったためだと思われるが、ガイダンスの際に松田先生から現況についての説明があった。それによると、今回活動する常呂は震源地からの距離も遠く、現状で物資の不足も見られるが我々の渡航する一週間後までにはその問題もなくなるだろう、とのことであった。一時は全道に渡る停電という未曾有の事態が発生するなどの困難な状況にありながら、我々を迎える準備をしてくださる現地のスタッフの方には本当に頭の下がる思いである。

ガイダンスの後は皆でホテルに向かい、疲れている人は休んだり、元気な人は浅草見物をしたり上野に飲みに出かけたりと、各自が思い思いの行動をして過ごした。夕食の際に出てきた湯葉やギンナンを日本人皆が英語で頑張って説明したのは思い出深い。

2日目—9月9日

今日の午前中は東大の考古学研究室の設楽先生の講義を受けた後、考古学研究室の列品室を見学するというスケジュールであった。設楽先生は旧石器時代から古墳時代あたりまでにかけての日本の歴史を考古学の観点からお話ししてくださった。特に興味深いものとしては、遺跡から発掘される耳飾りの種類を分類することによって、当時どのような部族が各地に点在し、どのような関係をお互いに持っていたのかということが明らかにされるというお話があった。私は列品室については以前設楽先生の授業の中で見学させていただいたことがあったのだが、東大の考古学研究室が長年の研究、発掘の中で見つけてきた埴輪、青銅器、鉄器と言ったものがずらりと並べられており壮観である。特に印象に残ったものとしては遼寧式銅剣が挙げられる。この遼寧式銅剣は中国の東北部でかつて独自に生産されていた特徴的な銅剣であり、中原地方で生産されていた銅剣とはかなり違う形態をしている。この遼寧式銅剣はのちに朝鮮や日本の金属器生産にも大きな影響を及ぼしたものであり、大変貴重なものといえる。

午後は本郷から江戸東京博物館へと移動し、館内の見学を行った。午前中は旧石器時代、縄文時代といった日本史のかなり古い部分を学んだのに、午後になって急に江戸時代、明治時代といった近世、近代の展示を見ることになったので若干戸惑っている海外の学生もいたものの、全体的には現在の日本文化の象徴的な部分の多くが完成したといわれる江戸時代についての知見を深められたので皆満足していたようである。ある海外学生は木でできた建物がすごく好きなので、江戸東京博物館の様々な木製製品の展示に感動したと発言していた。中には全体での見学が終わった後も興奮冷めやらず見学を続行する人たちもいた程である。

ホテルに帰り、夕食の時間にはまたもその日出てきた食材の英語での説明に追われた。かぼすとすだちの違いという、我々日本人にとってもよくわからないことについて日本人、海外学生双方で話し合いながら議論したのは中々興味深いものがあった。夕食後は上野のバーでダーツとビリヤードを楽しんだが、やはり海外学生は日頃からの経験が少なからずあり、日本人学生は圧倒される場面が多かった。

これが2日目であるが、実は私は夕食前まで就活の為の試験を受けねばならず離脱していたため、本郷と江戸東京博物館の話はほとんど伝聞である。ほかの人たちと離れて行動することは少し寂しかったが、夜の間だけでも一緒に活動できたので満足である。

3日目—9月10日

本日は日光に行く日である。昨晩の遊びの疲れからか朝は皆眠そうにしていた。浅草から東武線の特急で日光へと向かい、無事日光に到着したが、かなり雲が多く天気が気がかりな状況である。はじめに神橋を見学したのち、参道を通って日光東照宮を参拝した。

日光東照宮は陽明門が修理されたばかりでとても美しかった。建物に入ると巫女の方が狩野探幽によって描かれた天井の龍の絵や六歌仙の絵について話していたのだが、説明が日本語のみだった為に海外学生には理解が難しかったようであり、あとで日本人学生が解説するような形になった。建物を出た後は、長い階段を登って東照大権現として祀られている徳川家康の墓へと向かった。権現は「GOD」の一種であると海外学生には説明されたのだが、歴史上の人物である徳川家康が神として崇められているという概念は海外学生にとって少しわかりにくかったようで、納得してもらうのは難しかった。また、神道における神は、仏が衆生の前に姿を現した際の姿であるとする本地垂迹説や、薬師如来、布袋様などを海外学生に教えるのはとても難しいものであった。なお、東照宮の参拝を通じて、TAの岡崎さんが専攻の美術史に関連した知識を披露してくださったので、新しい視点から東照宮の様々な美術品を捉えることができとても興味深かった。

昼食は湯葉ラーメンやざるそばなどをいただき、東照宮に附設されている宝物館へ向かったのだが、案の定雨が降ってきてしまった。傘を持ってきていない人も多かったのだが、イギリスから来た学生たちは雨を気にもしない風であり、さすがは一年中雨の多いイギリス出身者だなと感心させられた。宝物館はかなり新しく、家康の遺品などがとても良い状態で保存されていた。一応歴史学専攻の学生の端くれである私は、館内に展示された様々な書物のくずし字を少

しばかり読んで勝手に興奮していた。

宝物館の後は徳川家光の墓のある大猷院近くの二荒山神社に参拝し、日光をあとにした。これで無事今日の日程も終了するかと思ったのだが、アクシデントが起こってしまった。帰りの東武線の特急に乗車中、東武線で人身事故が発生して途中駅で運転が打ち切りになってしまったのである。しかし幸いにして振替輸送を利用することで事故区間を避けることができ、時間は遅くなったが無事ホテルに戻ってくることができた。ホテルでは皆でスパゲッティをたらふく食べ、眠りについた。

4日目—9月11日

今日は谷根千散策の日である。谷根千、すなわち谷中、根津、千駄木のエリアは本郷からも近いのだがほとんど散策したことがなく、日本人の我々東大生としてもこの日の谷根千散策をとても楽しみにしていた。前日の夜、班内の話合いで東大生は谷中銀座などをオススメしたのだが、海外学生が観光地化されたところよりも、街中の小さな神社や寺を廻りたいという希望をしていたので、主に谷中の寺社の多い地域を歩くことにした。

我々の班ではまず鶯谷駅を降り、正岡子規がかつて暮らした子規庵を訪れた。子規庵は当時の姿を色濃く残した趣深い庵であり、海外学生も満足そうであった。次に浄名院、寛永寺の２つの寺院を訪れたが、浄名院は我々日本人も驚くほどの沢山の地蔵が所狭しと並べられている隠れ観光スポットであった。我々は地蔵菩薩とは何かといったことや、「へちま地蔵」の説明、秘仏の説明を海外学生に向けて行ったが中々難しかった。

昼食は「谷中ビアホール」という、夜はビアホールだが昼間は古民家風の食堂として開放されている場所で昼食をとったが、その内装はまるで『三丁目の夕日』に出てきてもおかしくないような昭和の香り漂うものであり、海外学生も「東京でこんな場所に来られるとは思ってもいなかった」などと驚いていた。

午後はまず天王寺、根津神社へ行った。天王寺は江戸時代に宝くじの起源として知られる富突が行われたという歴史があるようだが、その痕跡は残っておらず少し残念だった。天王寺本殿前には、平家物語の冒頭に登場する「沙羅双樹」が植えられていたので、源平合戦についてや、盛者必衰の意味などと合わせて海外学生に説明してみたところ、意外にもすんなりと理解してくれた。その後は東京駅へ移動し、東大が協賛しているインターメディアテクという博物館を見学した。インターメディアテクは説明を主眼とした従来型の博物館から脱却をはかり、所狭しと並べられた動物の骨格標本などを視覚的に楽しむことを主眼としたものであり、普段訪れるミュージアムにはない新鮮さを感じた。

夕食後は東京ドームシティの遊園地に行き、ジェットコースターやお化け屋敷を楽しんだあと、コンビニでお酒を買って飲み会をして大いに盛り上がった。

5日目—9月12日

この日は都内の複数の美術館を堪能する日であった。最初に訪れたのは竹橋にある国立近代美術館である。この美術館では近代に入ってからのさまざまなジャンルの美術品が展示されていたが、特に印象的だったのは戦争に関する絵画だった。戦争に関する絵画というと、もともと戦争を推進する政府や軍部に加担した画家によるものと、戦争に反対する意味を持ったものに二極化されるというイメージがなんとなくあったのだが、実際には中立的な立場、即ち戦争に賛成する意味も反対する意味もあまり持っていない絵画も存在するということに気づかされた。実際に展示されていたものの中でいうと、第二次大戦中に日本軍が強制的に作らせた泰緬鉄道の工事の場面を描いたものがあったのだが、その描き方はあくまで純粋に場面を描写したものであって、工事を賛美するものでもなければ悲惨さを訴えるものでもなかったのである。

次に訪れたのは、初台にある東京オペラシティのイサム・ノグチ展である。日本人とアメリカ人のハーフであるイサム・ノグチは、彫刻をはじめとする美術作品を数多く残していて、その作品の数々が観覧者のすぐ目の前にあるように工夫して展示されていた。歴史に関心のある私からすると、戦前から戦後にかけて日本や中国で活躍した女優である山口淑子（李香蘭）がノグチの妻であるという解説に興味をそそられた。

３つ目に訪れたのは六本木の森美術館である。特別展として建築の日本展が行われていた。会場が混んでいる上に時間もあまりなくゆっくりと見学することは出来なかったが、木造建築と現代日本建築が密接な繋がりを持っていることが随所で示されていてとても興味深かった。そして、建物の屋上部にあるスカイデッキから開放的な眺めを楽しみ、ホテルへの帰路に着いた。

この日は美術史の高岸先生が解説してくださる場面もあったが、基本的には自由に美術館内を歩き回る形態だったため、夜には皆かなり疲労していて、遊びに行くこともなく眠りについた。

谷中・根津・千駄木でのグループワーク
（谷中ビアホールにて昼食前に記念撮影）

博物館・美術館での実習（森美術館にて鑑賞する参加者）

6日目—9月13日

この日はまず、松田先生の解説のもと、上野公園内の散策をした。松田先生は、上野公園には歴史的に重要な意味がたくさんあるのに、その多くが現在では見過ごされているのが残念であり、この機会にぜひ知ってほしいと仰っていた。まず見学した摺鉢山古墳は、言われなければ気づかないような小さな古墳であり、松田先生によるとかつて明治大正のころには自殺の名所のような場所にもなっていたようである。我々東大生は上野至近の本郷でいつも学んでいるのにもかかわらずこのような歴史的事実を知らず、慚愧の念に耐えなかった。また今年の大河ドラマの主人公である西郷隆盛の像は、関東大震災の際、人々がお互いの安全を知らせ合うために住所などを書いた紙を貼るのに使われたという話もあり、近年災害の危険性が一段と増す中で忘れてはならない事実だと感じた。

散策が終わると、東京国立博物館へ向かった。東博はとても広く、全部をじっくりと見ていると日が暮れてしまうので、今回は平成館、本館、東洋館に絞って見学をした。海外学生達は特に平成館で展示されていた考古展示のうちの縄文土器に大変感心を持っていて、TAの池山さんに沢山質問していたほか、三冊ほど日本語の縄文土器に関する本を購入していた人もおり、日本固有の縄文土器に対する熱い情熱が感じられた。本館の日本ギャラリーでは、プログラムの後半で訪れることとなる北海道のアイヌ文化に関する展示がなされていて、多少なりとも予習することができた。東洋館ではインドネシアと日本の国交60周年を記念した展示が開かれていて、東洋館自体が日本近現代の歩みを象徴するものに感じられた。

午後は全員で歌舞伎を見に行った。まず希望者で歌舞伎ミュージアムを観覧したのち、演目を鑑賞した。見た演目は「俊寛」であり、12世紀の鹿ケ谷事件前後の政治状況を把握していないと理解が難しいものではあったが、海外学生もタブレット式の案内板を見ながら鑑賞していたのでそれなりに楽しめたようであった。ある海外学生は「歌舞伎を見て、歌舞伎と黒澤明の映画との関係性に気付かされた」と語っていて、海外学生の日本文化への造詣の深さに感服させられる思いだった。

夕食後はほとんどの人が疲れて寝てしまったが、私はルームメイトの海外学生を誘って銭湯に行った。彼はヒノキの風呂桶が気に入ったようで満足そうだった。

7日目—9月14日

9月14日、この日は朝から雨模様である。当初は多摩川台の古墳群をぐるりと回るコースが予定されていたが、悪天候ゆえに計画が変更されてまずは東急大井町線等々力駅近くの野毛大塚古墳にいくこととなった。等々力駅からは都内では稀有な存在である等々力渓谷を抜けて野毛大塚古墳へとむかった。野毛大塚古墳は松田先生によると長い間史跡としてではなく田畑やゴルフコースの一部として利用されて来たようであり、比較的最近になって墳形が復元されたそうである。以前は円筒埴輪が並べられていたそうだが、今は埴輪が跡形もなく片付けられてしまっていて少し残念だった。この野毛大塚古墳は都内の古墳にしては珍しく、古墳時代当時の姿が復元されたものであるのだが、復元の時期に日本の景気が上向いていたが為に復元工事も可能だったのではないかということで、歴史上また教育上重要な史跡であっても、経済的側面を無視できないというところに文化財保護行政の限界が感じられた。この古墳については、海外学生も興味を持った人が多く、たくさんの質問が先生に投げかけられていた。

野毛大塚古墳のあとは雨が若干止んできたことから、多摩川台古墳群へとむかった。多摩川台古墳群は、公園内に小規模ではあるが7つ程の古墳が連なって構成されている古墳群であり、一般的な古墳の保存状態を確認するにはとても良いスポットであった。古墳群には資料館が展示されており、決して規模は大きくなくとも古墳の被葬者や副葬品の情報などがコンパクトにまとめられていて、日本人、海外学生ともに理解を深めるのに丁度良かった。

上野に戻ったあとは、希望者で国立科学博物館を見学したのち、部屋飲みをして盛り上がった。この夜はあまり夜更かしせず、皆次の日の北海道行きに備えることとした。

8日目—9月15日

この日はいよいよ東京を発ち、北海道の常呂へと向かう日である。悪天候で霧が立ち込めるほどではあったが羽田空港を予定通りに離陸し、14時ごろには女満別空港に到着した。この日は何故か東京よりも北海道が暑い日であり、寒さを見越して厚着をしてきたメンバーは皆顔をしかめていた。女満別空港から常呂までは車で1時間ほどの道のりであるが、その道中では『北の国から』に出てきそうな、サイロや牧場が延々と続く如何にも北海道らしい風景を眺めることができ、1人感慨にふけっていた。

常呂の宿舎に着くと、東大の施設の先生方や研究員の皆さんが出迎えてくださり、短いガイダンスを済ませたあと、地元でいつも協力してくださっている方をお迎えして、卓を囲んでの飲み会が開かれた。地元の方は食料自給率に関する話題をはじめとして、常呂や周辺地域における農林水産業の様々な知識を披露してくださった。

飲み会がお開きとなると、希望者で外に出て星を見に行った。やはり都市から離れた常呂からの星空は格別のものであり、天の川も肉眼で確認することができた。その場にはハンガリーから来ている学生もいたのだが、彼はフン族のアッティラやその子孫と天の川にまつわる伝説を教えてくれて、代わりに我々で七夕伝説について紹介することとなった。お互いの国の素敵な伝説を教えあうことで国際交流の醍醐味を少しばかり味わえた気分になった。

9日目—9月16日

本日は常呂の2日目である。8日目までの一週間はずっと朝食をホテルに付属した食事処でとっていたために、常呂の宿舎の共有スペースで皆思い思いの食事をとる姿が少し新鮮であった。午前中の最初には、熊木先生による明治より前の北海道の歴史に関する講義が行われ、北海道には縄文文化ののち続縄文文化、擦文文化、オホーツク文化などが連続し、最後にアイヌ文化が現れたことが説明された。説明のあとには主に日本人学生の方から積極的に質問が行われ、具体的にはそもそもアイヌ民族とはどのような民族系統を持つ人々なのか、アイヌ文化の成立に当たって本州からの文化的影響はどのようなものがあったのか、樺太への元王朝による攻撃は北海道や樺太に住む人々に対しどのような影響があったのか、といったことが質問された。講義の後は常呂で発掘された続縄文文化や擦文文化などの遺物が展示された資料館を見学し、トドや鯨の骨から作られた骨角器や復元された土器などを見ることができた。展示の中には北海道胆振地方を震源とする地震で位置がずれてしまったと思われる

ものもあり、今回の地震の規模の大きさを物語っていた。

昼食をとり、まず行ったのは土器の接合体験である。実際に発掘された沢山の土器の破片の中から、同じ型式のものと思われるものを探し出し、ジグソーパズルのように一つ一つ当てはめていくという地道な作業であったが、思った以上にうまく接合せず、なかなか難しかった。この接合作業は１つあたり一週間程から数年にもわたってかかることもあるそうで、東京でもこの接合作業のバイトが存在していることが紹介されていた。次に訪れたのが常呂郷土資料館である。ここは以前小学校として利用されていた場所で、昔教室だった場所に戦前から戦後にかけて日本人によって使われた物品が割と無造作に展示されていた。私は、かつて常呂を通っていたが国鉄末期になって廃止された国鉄湧網線の駅で実際に使われていた通票や鉄道旗の展示に特に興味を持ったが、海外学生の中には戦時中に軍事教練で利用された竹槍の展示に非常に強い関心を持つ人もいた。この資料館は昭和に生きた人々の様子を感じ取るのにとても優れた施設だと感じられたので、もっと宣伝されるべきだと思うほどであった。

この日最後の訪問先となった原生花園では、サロマ湖とオホーツク海の両方を眺めることができ、秋のかなり温度の低いオホーツク海に足を入れたり、キタキツネを観察したりして、年甲斐もなくはしゃいでしまった。

夕飯はこの日から2グループに分かれて交互に作ることとなった。この日の夜はルーマニア学生が作ってくれたキャベツをふんだんに使ったトマトベースのルーマニア料理（作った本人も料理名はわからないらしい）と、餅を沢山使ったお好み焼きを皆で美味しく食べることができた。

10日目－9月17日

この日の最初は勾玉作りの体験である。滑石という、白い色をして比較的削りやすい石を紙ヤスリで根気よく削っていき、勾玉の形に仕上げていくという作業である。普段は賑やかなメンバーもこの作業には皆真剣に取り組んでいて、1時間半ほどで皆勾玉の形に近いものを完成させることができた。ほとんどの人は元々の石の凹凸を完全に取り去ることはできなかったが、中にはかなり滑らかに削りきることに成功した人もいてその図画工作能力に圧倒されてしまった。実際に古代に作られていた際には、滑石よりもはるかに硬いヒスイなどを用い、更に紙ヤスリなどではなく石で美しい勾玉を製作していたということなので、その技術力や根気には驚かされてしまう。

午後は11日目に発掘を行う大島遺跡の説明を受けた後、まず宿舎の近くにある「ところ遺跡の館」を訪れた。この施設は文化財の保存というよりも展示を目的とした施設であり、あまり広くはないが旧石器からアイヌに至るまでの土器や石器などがわかりやすく展示されていた。この施設の中の解説版の年表の中で、アイヌ文化が19世紀で終了しているようにも見える箇所があり、その意図とアイヌ文化の定義について参加者の中で様々な意見が交わされる場面もあった。海外学生も石器の種類や製造法などについて、先生方に活発に質問をしていた。

施設を出た後は車に乗り、常呂町内の遺跡を巡ることとなった。訪れたのは、竪穴式住居が再現された箇所や、貝塚の遺跡、アイヌの砦であるチャシの跡などである。チャシについては、和人（シャモ）側の記録や地域に伝わる伝承によると、戦いの際の砦として利用されたらしいものの、武器が全く発見されないため考古学的な見地から言うと戦いで利用されたとは未だ証明されていないことが説明され、新たな知識を得ることができた。

この日の夕食は、地元の方が作ってくださったカレーと自分たちで作ったサラダや油揚げの包み物をお腹いっぱい頂いた。

11日目—9月18日

いよいよこのプログラムの目玉企画ともいえる、遺跡発掘の日がやってきた。海外学生の中にも、この日の活動を非常に楽しみにしていてテンションが非常に上がっている人も見受けられた。車に乗り、常呂のランドマークと言われている通称「ホタテタワー」（実際にはホタテでなく、鳥を模したものらしい）の麓にある大島遺跡へと向かった。

まずは紐を張って掘る範囲を区切り、二班に分かれて発掘作業を開始した。表層の黒土を取り除くことから始めるのだが、木がかなり頑固に根を張っていて除去するのが難しく、序盤から体力をかなり消耗してしまった。しばらくすると、土器のかけらや黒曜石で作られた矢じり、剥片などが出土するようになった。表層の黒土及び木の根を除き終わると、色が変わって茶色の土が現れ、黒土の層に比べて黒曜石の剥片がより多く現れるようになった。最終的には30から40センチ程掘ったところで作業を終え、全体で大小合わせて20から30の続縄文文化などの遺物を見つけた。先生方によると、これ程までに沢山の遺物が一気に現れるのは珍しいことだという。私も正直これ程までに簡単に出土するとは思っていなかったので驚いてしまった。見つけた遺物の中には、先端の一部が欠けた矢じり

勾玉の製作体験
（手作業で削って磨きをかけ、勾玉を製作する参加者）

「大島１遺跡」にて遺跡発掘体験

のようなものがあり、TAの池山さん曰く、欠けているのは矢じりで獲物を取る際にかけてしまったものである可能性があるという。その他には石器を作る際に使ったと思われる大きな石の土台のようなものも発掘された。

午後も本来なら作業を続行し、人が住んだ痕跡があると思われる一番深い部分まで掘り進める予定だったのだが、生憎の雨となってしまい、午前中に掘り出した遺物の洗浄作業に移ることとなった。洗浄しても殆どの土器片は文様が現れなかったが、ひとつだけ文様らしきものが現れた。

この日の夕食は日本人側が焼きそばをつくり、海外学生のうちの1人のハンガリー人がトマトベースの鶏肉料理と、ポテトと小麦粉を混ぜて焼いた料理を作ってくれた。特にポテトの料理は美味しくて、レシピを教えてもらい自分でも作ってみようと思うほどだった。

12日目—9月19日

このプログラムも終盤に差し掛かってきた。毎日色々な体験をして疲れているはずなのに、海外学生は平気な顔をしてはしゃいでおり、そのタフさには驚かされてしまう。さて、この日は知床巡検の日である。いつもより早い時間に起きて車に乗り、知床方面に向かいながらいくつかのスポットを巡っていく行程である。常呂から知床までは地図上で見るとそこまで遠くないように見えるのだが、実際のところは車で三時間もかかるとのことであった。

朝早いが為に皆車で爆睡していたが、いつのまにか網走を過ぎていて、小清水町の原生花園に到着していた。この原生花園は、9日目に訪れたサロマ湖畔にあるものとは異なるもので、濤沸湖とオホーツク海に挟まれた高台に位置している。原生花園の展望台からはラムサール条約登録地となっている濤沸湖と、放牧された馬の群れ、冬を前にして既に荒々しさを見せているオホーツク海の全てを見渡すことができ、まさに壮観であった。原生花園でライアン先生を始めとする職員の方々と合流し、次に向かったのは知床博物館である。この博物館では斜里や知床の地域について歴史、風俗、生態など様々な視点からの展示がなされていて、特に壁一面に並べられた土器類や、剥製にされた動物の数々などは圧巻だった。一方、知床博物館に併設されている資料館では、斜里町が姉妹都市となっている弘前市についての展示がなされていた。展示の中では、かつて幕府の命令で斜里の警備を担当させられた津軽藩のたくさんの藩士が厳しい寒さへの備えを十分に行なっていなかったことが理由で死亡してしまったことが長年にわたって歴史から抹消されており、その事実は昭和になって偶然にも発見された、という悲しい過去の歴史が説明されていた。

昼食後はカモイベツ遺跡という、道路とオホーツク海に挟まれた狭い範囲に細長く続く遺跡を見学させていただいた。我々が訪問した際も発掘作業は現在進行形で行われており、1から2メートルほど掘って続縄文文化の層まで掘削が到達している箇所もあった。この地域では気候変動の盛衰が激しかったようで、続縄文文化のあとオホーツク文化に至るまでの層は非常に分厚くなっているのに比べ、オホーツク文化から現在に至るまでの層はかなり薄くなっていた。発掘作業の事務所の中では実際に発掘された土器や石器を手に触れて見ることができ、日本人学生や海外学生からは比較的珍しい彩文土器の製法などについて質問が出ていた。

さらに車に乗り、知床峠と知床五湖を訪れた。知床峠からは、日本百名山に指定された羅臼岳を望むことができるのみならず、海を挟んですぐの距離に国後島を望むことができ、安倍首相とプーチン大統領の平和条約締結を巡る交渉で北方領土問題が話題となる中で色々と考えさせられる思いがした。

夕食は時間が遅い為に弁当で済ませることとなった。食べ終わったあとは國木田先生に車を出してもらい、原っぱの中で満点の星空を眺めるという、都会では到底できないであろう体験をすることができた。

13日目—9月20日

この日は、私が個人的にかなり楽しみにしていた網走巡検の日である。私は石井輝男監督、高倉健主演の映画『網走番外地』シリーズのファンなのだが、その聖地とも言える網走の地に初めて足を踏み入れることができる期待に胸を高鳴らせていた。

本日一つ目の訪問は北方民族博物館である。この施設はアイヌ民族に留まらず、ウィルタ、ニヴフ、ナナイなど北東アジアの民族から北米のイヌイットに至るまで、北方に居住する多種多様な民族の展示がなされていた。私は札幌にある別の北方民族博物館にも行ったことがあり、そこもかなり気に入っていたのだが、それをも上回るレベルの充実度を感じることができた。具体的には各民族が利用している(もしくはしていた)日常用の衣服や祭礼用の衣服、アザラシをはじめとする海獣を捕獲するための猟具などが展示されていた。展示の仕方についても、民族ごとの紹介ではなく、衣服、道具

博物館見学（知床博物館にて）

博物館見学（北海道立北方民族博物館にて）

といったように、ジャンルごとに展示されていて理解がしやすいような工夫がなされていた。出口の近くではモンゴルやアイヌなどの民族衣裳を着て何人かで記念撮影をしたのだが、皆衣裳が驚くほど似合っていて面白かった。北方民族博物館については、英語の解説も非常に充実していたこともあって、日本人学生、海外学生双方が絶賛していたように思う。

次の施設は網走市郷土博物館である。あまり見る時間はなかったが、鮭や羆などの剥製が所狭しと並べられている一階と、旧石器から昭和に至るまでの歴史が凝縮して紹介された二階から構成され、時間があればもっと見たかったというのが正直なところである。ここでは「皇紀2600年」という年代表記に時代を感じたほか、中世の網走では存在するはずのない「応永」という京都の朝廷の元号が刻まれた石碑が展示されていて、その意味について先生方や学生で話し合う場面もあった。

昼食は博物館網走監獄の入口にあるところで、現在の網走刑務所のご飯を再現したものをいただいた。一見質素ではあるが、小学校の時食べた給食と同じような見た目であり、味もなかなか良かった。網走監獄博物館は2時間ほどの見学時間では到底見きれないほどの広い面積を持った博物館で、各々の建物内の説明も充実しており、かなりの満足度を得ることができたように感じた。特に各所で強調されていたのは、網走監獄の囚人がロシア帝国の南下に備えるための道路などの施設を作るための強制労働の担い手として期待されたという事実であり、実際に上川から知床、根室方面に及ぶ道路建設の際は700メートルに1人の頻度で囚人が命を落としていったという。これら強制労働については山縣有朋や金子堅太郎といった当時の政府首脳陣も、そのような網走のあり方を積極的に支持したそうである。北海道でトンネル工事などの際にタコ部屋労働が行われ、多数の死者が出たという事実は知っていたが、タコ部屋労働がそもそも網走の労働を参考にしたものであるという新しい知見も得ることができた。

網走監獄の後は、モヨロ貝塚博物館を見学した。ここはオホーツク文化を担ったモヨロの人々の生業を紹介した小規模な博物館で、独特の文化を有していたモヨロの人々の魅力を余すことなく伝えていた。館の近くには、サハリンの北部に居住するニヴフの人々の竪穴住居が再現されている場所もあり、皆興味深そうにのぞいていた。夕食は手巻き寿司とパンケーキを美味しく作って食べ、その後は連日の疲れからか皆あっという間に寝てしまった。

14日目—9月21日

このプログラムの修了の日を迎えた。二週間の期間にわたり人文系の多岐にわたる範囲の学習をしてきた疲れはたしかに見られたが、かなり充実した日々を過ごしてきた満足感も同時に感じることができた。

この日の午前はまずライアン先生による、アイヌを題材とした漫画に関する講義を受けた。私は講義を受けるまで正直『ゴールデンカムイ』ぐらいしかアイヌに関係した漫画を知らなかったが、1950年代の貸本と呼ばれる形態の漫画の時期からさまざまなアイヌに関わる漫画が描かれてきたことを知った。そのほとんどのものが支配地を広げていく和人（日本政府）とそれに抵抗するアイヌの相克を描いたものであって、紹介されたある漫画は北海道の開拓に伴うアイヌへの圧迫と、日本の満州進出と現地の人々への圧迫を重ね合わせて表現しており、その奥深さを感じることができた。私は手塚治虫の作品はいくつか読んだことはあったが、今回の講義で紹介された『シュマリ』については読んだことがなく、手塚治虫自身による綿密な研究に基づく執筆に興味を抱いたので、今後ぜひ読んでみようと思った。ただライアン先生は同時に、漫画には事実に基づいたものとフィクションが入り混じっているので、その分別をしっかりとつける必要があるということもおっしゃっていた。

昼には修了式が行われて、想像していたより遥かに立派な証書をいただいてしまい、恐縮してしまった。この後レポートを皆で完成させて、フェアウェルパーティーを開催し、無事にプログラムは終了となった。

プログラムを終えて

二週間、東京から北海道にわたって行われたプログラムは想像以上に濃密で、これからの人生の糧となるであろう知識を多く身に付けることができたし、何よりもヨーロッパの各地域から集まった学生と活発なやりとりをするという滅多にない体験をすることができた。発掘の日など天候に恵まれない日もあったものの、全体を通して大きな問題も発生せず無事にプログラムの終了を迎えることができたのは何よりだと思う。

最後に、このプログラムを主催してくださった先生方、TAの皆さん、その他各施設の職員の皆さん、貴重な経験をありがとうございました。

（文責：島貫亮）

修了式（終了後に修了証を手に記念撮影）

テーマ別レポート

小林鷹義、島貫亮、野中崇遥、前田将吾

1. 響き合う文化たち

本プログラムは東京大学と英国のセインズベリー日本藝術研究所によって共同で行われるものであり、第一義的には日本と英国の間の国際的な文化的交流が目的であるように見える。僕も参加する以前はそう思っており、そこに魅力を感じたために参加を決めたのであったが、実際に2週間の経験を終えてこうして筆を執ってみると、このプログラムにおける文化的交流は必ずしもそのような単純なものではないことに気づかされる。

第一に、セインズベリーからの参加者には英国人3人のほかにハンガリー人とルーマニア人が1人ずつ含まれていたし、英国人3人もそれぞれに出身地は異なっていた。僕は言語学に興味があるので英国における地域的方言の多様性については多少の知識を有していたが、今回長期間にわたってそれを実際に観察できたことは非常に有意義であった。またルーマニアとハンガリーは隣国であり、歴史的に友好から敵対さらには民族的混交まで複雑な関係を経験してきているが、彼等ふたりの会話にはしばしばそのような話題が登場し、横できいていて興味ぶかく感じるとともに、日本と東アジア諸国との関係に思いを致すことになった。行動を観察していても5人それぞれに異なり、考えてみれば我々日本人学生にしてもそれぞれ性格や出自は異なるのだから当然のことではあるが、海外学生にもそれぞれの個性が感じられた。

第二に、本プログラムにおいては時間もまた重要な要素であった。というのは、プログラムの主軸を占める考古学が遠い過去を対象とする学問であることのほかに、今回訪れた博物館・美術館で鑑賞した展示は大半が同時代を対象とするものではなく、その意味でそれらが日本という地理的条件のもとにあるにしても、親近性よりは異質性を強く感じさせるものであったからである。すなわち日本―英国という軸のほかに、あるいはそれ以上に、現在―過去という軸がこのプログラムを通底していた。過去をいかに理解し未来へと手渡していくのかという問題は現在に生きる我々が常に抱えているものであると改めて感じさせられた。

第三に、周知のように、本プログラムの後半において訪れた北海道の地は日本の内部における他者である。僕は日本史Bを高校では途中までしか履修していなかったこともあり、恥ずかしながら北海道の近世以前の歴史については全くの無知であったが、北部と南部に異なる文化が存在したこと、本州との間に交易があったことなどを学んで非常に興味をもった。またプログラムの終盤に訪れた北方民族博物館は北海道のみならず広く北方民族の文化を比較しつつ展示するものであり、グローバルな歴史・文化研究のために優れた資料を提供していた。さらに、知床を訪れた際に、対岸に国後島を望んだことによっても、連続する自然のうちに国境という人為が作られること、しかし文化は国境によって必ずしも分断されるものではなく、またそうあるべきでもないことを感じさせられた。

グローバリズムが常態化し、それへのカウンター的な動向も噴出する現代において、文化的多様性を擁護し、なおかつそれが安易なナショナリズムに堕すことを避けて人類の平和と繁栄を図るためには、以上のような多様な視点をもち、文化を複合的に理解する、あるいはそれが不遜な表現ならば、そうしようと努めるべきである。そのために、本プログラムは多様な他者に触れる経験を提供してくれた。プログラムの運営者と参加者の各位に感謝しつつ、ここに筆をおく。

（文責：小林鷹義）

2. 博物館とその意義

今回の文学部サマープログラムでは、多くの博物館および諸展示を訪れた。具体的には、東京パートでは東大文学部考古学列品室・江戸東京博物館・日光東照宮宝物館・インターメディアテク・東京国立近代美術館・東京オペラシティアートギャラリー「イサム・ノグチ展」・森美術館「建築の日本展」・東京国立博物館・歌舞伎座ギャラリー・多摩川台公園古墳展示室、続く北海道パートでは東大文学部常呂資料陳列館・常呂町郷土資料館・ところ遺跡の館・斜里町立知床博物館・北海道立北方民族博物館・網走市立郷土博物館・博物館網走監獄・モヨロ貝塚館である（もちろん当プログラムにおいて他にもたくさんの遺跡・神社仏閣等を訪問し、歴史ある地を散策し、また先生方の講義やツアーにより多くの知識と経験を得た）。私はふだん博物館や地元の郷土資料館といったところに足を運ばないので、今回のプログラムはそういった場所を訪れるすばらしい機会となり、私に多くの発見をもたらしてくれた。どの博物館・資料館もそれぞれ独自の方法でさまざまなものを展示していて、非常に刺激的であった。以下、私が各種の博物館・資料館を見て回って感じたことと問題意識を述べる。

端的に、博物館を回ることで、過去および現在の膨大な記録、知の集積に触れることができる。たとえば東京駅のインターメディアテクには、工学系の機材、動植物の標本、彫像など、東大創設以来の歴史的・学問的価値の高い貴重な物品が所狭しと並んでおり、目を奪われた。また網走監獄では、ふだん知ることのできない監獄生活の様子、北海道開拓の血と汗の歴史などをまざまざと見せつけられた。

博物館見学（北海道立北方民族博物館にて）

これらの展示物はどれも自分の生活と切り離すことができないものだ。たとえば私は東大の学生であり、その歴史を多少は知っているものの、大学がその歴史を歩むなかで生み出してきた知の結晶体である機械・標本・彫像などは実際に目にしたことがなかったし、まさか東京駅の展示館に大量に並べられているとは思いもよらなかった。また網走監獄も、その場所自体は移築され博物館として展示されてはいるものの、刑務所自体は今も存在し、そこであったこともすべて真実である。私は恥ずかしながら日本のどこにどれくらいの刑務所があり、ふだん入所者がどのような生活をしているのかまったくわからない。しかしたとえば網走では、入所者の作成した生活用品が売りに出されるなど、刑務所を異質なものではなく地域の一部として結びつけようとする活動が行われている。これを知った私は今までの自分の視野の狭さに愕然とした。ふだん刑務所のことなどは考えたこともないが、それは地域に確かに存在し、無視することはできないのだ。

このような経験を踏まえると、博物館等の展示は、我々がふだん目を向けないものに光をあてる重大な機能を担っているといえる。しかしながら全国にはたくさんの博物館があり、そのうち行きにくかったりあまり宣伝されていなかったりする場所も少なくない。これはとてももったいないことだ。せめてどこにどのような博物館があり、どのようなものが得られるか、そういったことだけでも漠然と知っていれば、我々はもっと深い知に触れられる。まずは私がさまざまな場所を訪れて、その魅力を発信する役目を担うしかないが、教育現場において、もっと「実物に触れる」経験の重要性が訴えられてしかるべきである。

（文責：野中崇遥）

3. クマを崇拝する

今回のプログラムで複数の博物館を訪れる中で、私が特に関心を持ったのはアイヌやオホーツクの人々がとりわけクマに畏敬の念を抱き神聖視していたということである。例えばアイヌ社会では「熊送り」と言われる伝統的な儀式が行われており、そこではクマが祭壇の柱に美しく飾られ、丁重な霊葬が執り行われた。このようなクマの霊葬は北海道のみならず北方ユーラシアから北アメリカの広い地域でも見られることであり、クマは北方民族にとって特別の存在であったと言えるだろう。

ただ、なぜクマなのだろうか。クマの何が人々にそのような感情を抱かせ、特別な儀礼をさせるのだろうか。

天野（2007）によると、その答えとして三つの説が挙げられている。第一に、クマが人々にとって圧倒的な力をもつ存在であったからだ、という説。狩猟採集に従事していた人々にとってクマの持つ筋力や鋭い嗅覚は魅了的なものであったと予想される。

第二に、その社会にクマにまつわる民話が伝わっており、その民話によってクマがその社会で特異的な位置を占めていたという説。見たところこの説は、クマが崇拝されていたからそのような民話が残っているのか、その逆であるのかは判然としないが、そのような民話の存在もクマが神聖視されていたことを裏付ける重要な証拠であろう。

最後に、クマが単なる「猛獣」ではないからだ、という説。クマは主に植物を摂取しており、本来人間を襲うような動物ではない。力が強いだけの猛獣では、人間に畏敬の念という複雑な感情を持たせるのは難しいと天野は述べる。

その他、クマの二足歩行をしている時の姿や子供を愛情深く育てる様子などが人間に似ているということも関連しているという説がある。いずれにせよ、人間が羨むような力を持っているものの、決して人間と対立しているわけではなく、更には人間との共通点まで見出せるというクマと人間の繊細な関係性が、クマを崇拝の対象たらしめているのであろう。そのように考えると、何となく現代の宗教における「神」の性質と似通っているようにも見えてくる。

近代以降、人間は「自然」と「我々」という二元論を構築することで自然を開拓し、自然と人間との対立を深めてきた。現在でもクマは恐れられる存在でありながらマスコットでもあるという複合的な側面を持ってはいるが、以前のようなクマと人間が森の中で双方向的に絡み合い、時には人間がクマを同一視しながら独特の関係を築き上げた時代から、クマと人間を「動物」と「ヒト」として認識する時代へと変容しつつあることによって、人間のクマに対する畏敬の念も失われてきたと言えるかもしれない。

【参考文献】木村英明・本田優子編（2007）『アイヌのクマ送りの世界』同成社

（文責：前田将吾）

博物館見学（網走郷土博物館にて）

5 総　括

5 年目の夏

５年目の夏の文学部特別プログラムが無事終了した。今回は、英国から４名、ハンガリーから１名の学部学生を迎え、東大からは教養学部３名 (前期課程２名と後期課程１名) と文学部生１名の４名が参加した。昨年とほぼ同様の９月８日から 22 日までの 15 日間、文字通り寝食をともにしながらのプログラムを体験してもらった。今年はプログラム開始直前の９月６日早朝に、北海道厚真町付近を震源とする最大震度７の大地震が起き、道内全域が停電となる大災害に見舞われた。後半１週間のプログラムを開催する常呂実習施設は道東に位置していたため幸い地震の直接的な被害はなかったが、それでも開始直前までには停電が続いていた。だが結果的には無事に全プログラムを終了することができ、ホッと胸をなでおろしたのは事実である。

本プログラムは、主として考古学と文化資源学に関する学習を通して、さまざまな現地体験を共有しながら、日本とヨーロッパの学部学生に国際交流の実を体得してもらうことを主眼としている。今年も前半の東京の部 (9 月８日～ 14 日) では、東京の代表的な博物館 (東京国立博物館・江戸東京博物館・東大インターメディアテク等)、美術館 (東京国立近代美術館・初台オペラシティーアートギャラリー・森美術館等) の施設や展示を見学し、１日日光に出かけた。希望者は、歌舞伎座にも赴いてもらった。上野公園や野毛大塚古墳・多摩川台古墳群といった歴史文化遺産にも出かけた。日光見学は、海外からの受講者にはすこぶる評判がよい。根津・谷中・千駄木といった下町でのグループワークは、東大生と海外からの受講生が親密になるよい機会を提供している。

全期間を通じて、東大学部生と外国からの参加学生を区別せず、東京では上野のホテルで、後半の人文社会系研究科附属常呂実習施設では学生宿舎で同室してもらった。最初はどこかぎこちなかった学生たちも、２週間にわたって同室する体験を通じて、次第にお互いを理解しあい、最後には人生観までも英語で語り合うことができるようになったようだ。プログラム終了後も相互の関係はずっと継続していると聞く。座学・実習はもちろん、日常会話は全て英語が基本である。定員 10 名という受講生の数は、プログラムの効果を最大限に高めるのにほどよい規模と思っている。

後半の常呂 (9 月 15 日～ 22 日) では、道東という立地から、一転して朝晩は肌寒く感じるほどの冷涼な天候のもと、北海道の先住民が残した遺跡の体験発掘や付属の資料陳列館を利用した体験学習、地域の博物館活動に参画することを通じた社会連携の具体を知る機会を得た。講義や実習見学では、東大生もほとんど知らない北海道の独特の歴史を、実際の遺跡や遺物を前にして、文字通り体感しながら学ぶことができたはずである。常呂実習施設での朝晩の食事は、食材の買い出しから食器洗いまで、日欧双方の学生ペアによる自炊であり、交流の実を上げる格好の機会となった。

本プログラムの実施は、2015 年１月に英国セインズベリー日本藝術研究所と文学部との間で締結した部局間国際交流協定に基づいている。今年協定を改定し、来年度も交流を続けることにした。夏は東京と常呂に英国をはじめとする海外からの学生 (5 人) を招いてプログラムを実施し、冬は英国に東大の学部生５人を同期間 (2 月、15 日間) 派遣している。本プログラムは、文学部だけではなく、広く前期・後期課程の全学部に開放されているので、来冬も多数の参加希望者があるだろう。毎回少しずつではあるが、より内容の濃いプログラムに改善していきたいと思う。

末筆ながら、参加・担当・協力いただいた全ての教職員・TA・関係者の皆様に深謝いたします。

東京大学大学院人文社会系研究科・教授

佐藤 宏之

（山上あかね撮影）

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部

東京大学大学院人文社会系研究科附属
北海文化研究常呂実習施設

〒093-0216 北海道北見市常呂町字栄浦376

東京大学 本郷キャンパス

〒113-0033 文京区本郷7-3-1

セインズベリー日本藝術研究所

ノーフォーク州ノリッチ

平成30年度
文学部夏期特別プログラム
（報告書）

編集発行　東京大学大学院人文社会系研究科・文学部
〒113-0033　東京都文京区本郷7-3-1
発 行 日　2018年12月4日
印　　刷　ヨシダ印刷株式会社

原生花園駅(JR釧網本線)

夕暮れ時のサロマ湖畔

東大文

SAINSBURY INSTITUTE
for the Study of Japanese Arts and Culture
セインズベリー日本藝術研究所

http://www.l.u-tokyo.ac.jp/

知床五湖と知床火山群